

令和七年度 入学試験問題

国語（理系）

一〇〇点満点

△配点は、一般選抜学生募集要項に記載のとおり。▽

（注意）

- 一、問題冊子および解答冊子は監督者の指示があるまで開かないこと。
- 二、問題冊子は表紙のほかに10ページある。
- 三、問題は全部で3題ある（1ページから10ページ）。
- 四、試験開始後、解答冊子の表紙所定欄に学部名・受験番号・氏名をはっきり記入すること。表紙には、これら以外のことを書いてはならない。
- 五、解答は、すべて解答冊子の指定された箇所に記入すること。
- 六、解答に関係のないことを書いた答案は無効にすることがある。
- 七、解答冊子は、どのページも切り離してはならない。
- 八、問題冊子は持ち帰ってもよいが、解答冊子は持ち帰ってはならない。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(四〇点)

われわれの周囲は、^①烈しい都市化の傾向にある。東京だけではない。大阪、名古屋だけではない。京都、奈良、金沢のような古都も、また、名の知られぬ町や村さえも……。

「都市化」とは何であろうか。

もとより、都市は、現代に始まるものではない。今日知られているもとも古い都市は、七〇〇〇年前の新石器時代のトルコの都市であるという。人々は土製の家に住み、天井から出入りする。しかし、すでに工場があり、市場がある。交換経済がかなり広範囲に行なわれていたと推定されている。

ギリシャ人は、都市国家「ポリス」群を形成し、かれらは誇らかに「ポリスに住まないものは人間ではない」と考えていた。ルネサンスのイタリアの諸都市は「都市の空気は自由を作る」といわれ、人間解放の場と考えられていた。

われわれは、都市を政治的自由と結びつけて考える伝統をもっていない。それにしても、「町は自由でいい」と田舎の人たちには考えつづけられていた。長い間、われわれの観念にある「都市」^{まち}は、文明の利器に囲まれた文化的な生活であり、洗練した趣味であり、そうして地縁的な、また血縁的なさまざまなクビキからおのれを解放し、一人の人間として生きるチャンスを求める場であった。都市は、そのようなものとして、強大な吸引力を発揮しつづけてきた。「あそこへゆけば、ないものはない」、「あそこへゆけばチャンスが待っている」、「美しい恋人にめぐりあえるかも知れない」等々。

しかし、都市は、いまもなお、^②そのように「かわいらしいもの」であろうか。

まず、都市は、人間にとって自然に対する新しい関係である。

自然を握り込み、その荒涼とした面を和らげ、いわば庭園化し、そのような、飼いならした自然の中におさまっている都市もある。京都や金沢のような街がそうである。そのような特別な街でなくても、自然の枠の中におさまっている街はまだ少くない。われわれにとって長らく街とはその程度のものであった。蚊やり火のかすかな匂い、打ち水をした道からたちのぼる

冷氣、それらにまじるかすかな虫の音、時に蛙かえるの声……。

記憶は次第に薄らぎつつあるが、たしかに戦前の日本の都市は、今日のように常軌を逸したものではなかった。東京や大阪の街は、四通八達した運河に貫かれ、岸べには柳の老樹が深く影を落としていた。機械的なものは町の点景にすぎなかった。

しかし、今日の大都市はもはやそうではない。自然は外に放り出され、コンクリートの立体的な、機械の内部のような街が今日の近代的な大都市である。自然は、そこにとり残された水たまりのように残り、また、もとより、空はなお春の雲を浮かべ、秋の雲を渡らせてゆく。しかし、人間の生活は、自然を閉め出し、勘定に入れないで営まれてゆく。

⁽²⁾都市化とは、まず、このように自然を「疎外」し、自然から「疎外」された生活である。それは、人間にとつてまったく新しい体験である。人間の長い歴史、あるいは人間以前からの生物の長い歴史の中で、いつも大地は身近にあり、水は、雲は、微風は、身近にあった。植物や動物たちは身近にあった。自然がわれわれを包んでいた。それらのものの与える「大地の感覚」はわれわれの精神を正常に保つ上で、微妙な働きをしているものではないだろうか。牢獄ろうごくにあるのと同じくらい自然から距はなてられることは、何か、目にみえない影響を心のはたらきに及ぼさないだろうか。

具体的に大地を踏みしめて生きることと、みずからの正常さに対するゆるぎない信頼、いわば、⁽³⁾自己の存在に対して「大地の感覚」をもつて生きることとの間に、つながりはないのであるか。われわれの意識がこのような環境、いわば、交響樂における基底音のように、はつきりとは聞きとれないが、たえず鳴りつづけているものに、どれほど深く影響されているか、誰も言うことができないだろう。

しかも、都市的な生活は、自然からだけ疎外された生活ではない。それはまた他の人間との関係も変えてゆく。大家族、隣近所、それらはたしかにわずらわしい、うるさい存在である。長らくわれわれは、それらにとり囲まれて、息づまる思いで生きてきた。今日でもなお、それらがなくなったわけではない。

しかし、行きずりの人までふくめて、他人は不必要なのだろうか。

「東京は、他人の眼がなくなつて、ほんとうにさばさばした町ですわ」とひとは言う。

たしかにそうである。お祭ごとの寄付金、町内会、そうして、いつも口さがない近所の老人たち、それらは、地方の生活を今もなお、やり切れないものになっている。恋人と手をつないで歩くには、ひとの話題にのぼるのを必ず覚悟しなければならぬのが、今日でも地方都市の多くの実状なのだ。

職場、それと家庭をつなぐ交通機関、夫婦中心の家庭、少数の友人、それからいくつかのゆきつけの店、好みにかなったレクリエーションの行き先。それだけ、そうしてそれだけしかもたないことは、大変すっきりした人生を約束しているかにみえる。少なくとも地方都市からはるかに望み見る時はそうなのだ。

しかし、たとえば、ある友人は、東京に移り住んだ体験をこのように語る。

「久しぶりに京都へ行って、市電に乗った。するとね、不思議なんだ。乗客のあいだに何か交感がある。赤の他人のはずなのに感情の交流がある。石ころと違ったものとして、触れ合っている。東京では、そうじゃない。電車のほうも石ころを運んでいるつもり、こちらのほうも、運ばれているあいだは、死んだも同然。『存在すること』を止めて^やいる。京都に住んでいた時は、ああいう、低音の交感など気づきもしなかったがねえ」。

(4)
筆者も同感である。

ゆきずりの他人すら、大きな力をひとに及ぼしているのだ。祭の日のざわめきの中で、おのずと表情はほころび、心はなごむ。あご紐^{ひも}をかけた警官隊がいならぶあいだを歩かねばならぬ時、頬はこわばり、心はひきしまる。人の表情の、心に及ぼす力は大きい。石の表情をした人たちに囲まれ、職場に運ばれ、家庭に戻るあいだ「人間の壁」に囲まれていると感じるとき、その影響するところ、みずからも「心の表情」を失ってゆきがちなのは、大いにありうることである。行きずりの人間からの疎外感も、徐々ではあるが、大きな影響を与えるものといわねばならぬだろう。

(中井久夫「現代社会に生きること」(一九六四年)より。一部改変)

注(*)

「都市の空気は自由を作る」＝通常は中世自治都市を言い表したドイツのことわざとして知られる。

問一 傍線部(1)について、都市が「かわいらしいもの」であるとはどういうことか、説明せよ。

問二 傍線部(2)は、どういうことか、説明せよ。

問三 傍線部(3)は、どういうことか、説明せよ。

問四 傍線部(4)「筆者も同感である」とあるが、筆者は友人の言葉を受けとめてどのように考えているか、説明せよ。

次の文を読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

友だちがけがをして入院したことがあった。私はその友人を私の友だちの中で、あんまり大切に思っていなかった。見栄^{みえ}っぱりで、うそつきで派手好きで、かつこばかりつけるばかな奴^{やつ}と思っていたのである。時々、つき合っているのは時間の無駄だと思つてさえたのである。

友だちは鼻の骨を折つて、顔の真ん中を白いほうたいをぐるぐる巻きにして、ベッドに横になつて、私の顔を見ると、ほうたいからはみ出した目と口で笑つて「イテテ」といつて笑つた。「どうしたの」「ベンキ」「ベンキがどうしたの」「ハナ、ベンキ」「あほじゃない。ベンキで鼻折つたの、どこの」「いえない。イテテ」

怪奇映画の主人公のように友人は口をゆがめた。その時、私は涙があふれて来たのである。アンタ、死ぬんじゃないよ。絶対に死なないで。ほうたいを顔の真ん中に通過させている友だちは一瞬⁽¹⁾にして私を了解させた。

この人は、私のばかなところ、だめなところ、いやなところ、くだらないところを引き受けてくれていたのだ。この人がいなかったら、私のいやなところ、くだらないところは行き場を失つて、私の中にあふれ返つて生きてはいけなかったのだ。立派な尊敬にあたいする友人だけを持つていたら、私はなんと貧しい土に生きている生き物だっただろう。二人で過ごしたおびただしい無駄な時の流れ、その無駄を吸い上げて、私たちは生きてきた。

おみやげの梨を、「こんなものいらない、持つて帰つて」「絶対に持つて帰るもんか、死んでも持つて帰らない」と投げ合い、二人で泣きながら、「あんたなんか、もう二度と顔みたくない」「私だつて、絶交すればせいせいする。すつきりするわ」といつて、ドアがこわれるかというほどたたきつけた日があった。

私がおなかを手術して入院していた時、私は抜糸もすんでいないおなかをかかえて、公衆電話から、「病院に払うお金貸して」と電話したことがあった。私の見栄が他の友人ではなく彼女をえらんでいたのだ。

突然夜中に、「今日、私、あなたのところに泊まつているんだからね、よろしく」といわれると、「わかったわよ」といつてい

た。⁽²⁾彼女もまた立派ではない私をえらんでいた。

考えてみれば、友だちというものは無駄な時をともしついやすものなのだ。何もしゃべることなぞなく、ただ石段にすわって、風に吹かれて何時間もボートとしたことのある友だち。失恋した友だちにただふとんをかぶせる事以外何も出来なかった日。中身が泣いているふとんのそばで、わたしはかつおぶしをかいていた。

人を待たせる友だちになれて、喫茶店で本を読んでいた無駄な時間。しつこいへえが、私のまわりをブンブンとびまわって、私はいらいらしていた。私ははえばかりをにらみつけて、本の続きを読むと、もう読んだところばかり何度も読んでいた。

友だちというものはお金になるわけでもなく、社会的地位向上に役立つものでもない。もしのように友人を利用したら、それは友情とは別のものである。結果として友人があたえてくれるさまざまな目に見えるもの見えないものがあつたとしても、決してそれが目的ではない。

トマトを作ろうとすれば、トマトは地面に生えていなくてはならず、雨も、太陽も必要である。トマトだけを考えれば、土も雨も太陽も無駄である。(トマトを水だけで作るものを本屋で売っているけど、変だと思いませんか?)

だから、私たちは太陽に感謝し、土に感謝するのである。土なんかきたなくていろんなものがごっちゃごちゃにはいつていて、バイキンだつてくさつた魚だつて混っているのである。

私は鼻をほうたいで巻いた友人の泣き笑いで、ひれふして何かわからぬものへ感謝したい気持ちになつた。⁽³⁾無駄なものなぞ何もないのだ。人も土であり、太陽であり、雨なのだ。私は無駄なものが好きだつたのだ。すぐには役に立ちそうもないものや、何に使ったらよいかわからないものが好きだつたのだ。能率や、成績や進歩に直接かわからないものが好きだつたのだ。それがいちばん大切なものだつたのだ。

やがてそれらのものが年月を経て、あらゆる無駄なものを吸い上げて、それぞれの人が、その人に見合つたトマトを实らせていくと信じていたのだつた。

(佐野洋子『友だちは無駄である』より)

注(*)

かつおぶしをかいてⅡかつおぶしを削つて。

問一 傍線部(1)について、「私」はどういうことを了解したのか、説明せよ。

問二 傍線部(2)はどういうことか、説明せよ。

問三 傍線部(3)のように「私」が感じたのはなぜか、説明せよ。

白 紙

次の文は、本居宣長『玉勝間』の一節である。これを読んで、後の問に答えよ。(三〇点)

仮字^{かな}づかひは、近き世明らかに^{*}なりて、古まなびする⁽¹⁾かぎりの人は、心すめれば、をさをさ誤ることなきを、宣長が弟子どもの、つねに歌書きつらねて見するを見るに、誤りのみ多かるは、又いかにぞや。抑もてにをはのととのへなどは、うひまなびの力及ばぬふしあるものなれば、誤るも罪ゆるさるるを、仮字づかひは、今は『正濫抄』^{*}もしくは『古言梯』^{こげんてい}などをだに見ば、むげに物知らぬわらはべも、いとよくわきまふべきわざなるを、猶^{なほ}とりはづして書きひがむるは、⁽²⁾かへすがへすいかにぞや。これはた心とどめず、又ひたぶるにまなび親にすがりて、「たがへらむは直さるべし」と思ひおこたりて、おのが力いれざるからのわざにしあれば、かつは憎くさへぞおぼゆる。しか人にのみすがりたらんには、つひに仮字づかひをば、知る世なくぞやみぬべかりける。されば「い・る」「え・ゑ」「お・を」、又「はひふへほ」「わあうゑを」、又「しちすつ」の濁音^{じろいん}など、いささかもうたがはしくおぼえむ仮字は、わづらはしくとも、それしるせるふみを、書かむたびごとにひらき見て、たしかにうかべずは、やむべきにあらず。⁽³⁾何^{なん}わざも、おのが力をいれずては、しうるることかたかんべきわざぞ。人の子の、年たくるまで親の手はなるること知らざらむは、いといと言ふかひなからじやは。

(本居宣長『玉勝間』より)

注(*)

近き世明らかなりて＝江戸時代、歴史的仮名遣いの規則が打ち立てられて研究が進んだ。
てにをはのととのへ＝助詞などの使い方。

『正濫抄』もしくは『古言梯』＝どちらも仮名遣いの実例を記した書物。

「しちすつ」の濁音＝「じ・ぢ」「ず・づ」の仮名遣いを指す。

問一 傍線部(1)を現代語訳せよ。

問二 傍線部(2)について、著者は何を疑問に思っているのか、「てにをはのととのへ」と対比しつつ説明せよ。

問三 傍線部(3)を現代語訳せよ。

問題は、このページで終わりである。

